

◇ 目次

1. 「早道之者」の足跡をたどるツアー実施
地域貢献センター長 清川 繁人…1
 2. 幸畑団地・青森大学の合同防災訓練
地域貢献センター 榎引 素夫…3
 3. 10～11月の活動報告
観光文化研究センター長 佐々木豊志…4
 4. SDGs 研究センター活動報告
同センター所長 藤 公晴…10
 5. 公営バス事業経営改善に向けた提言について
青森大学附属総合研究所顧問 井上 隆 …13
 6. 新聞を活用した特別授業の展開
社会学部 榎引 素夫 …13
- ▽総研日誌 …15
- ▽編集後記 …15

1. 「早道之者」の足跡をたどるツアー実施

本年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、青森大学と包括的連携協定を締結する自治体との連携事業実施は困難な状況にあります。こうした中、地域貢献センターが5月、2回にわたり平内町の住民を対象にイルカウォッチングツアーを実施したのは、既に報告の通りです。

本学が連携協定を締結している三戸町は南部藩の城下町であり、一方平内町は津軽為信によって南部領から津軽領になり、以降藩境となって両藩の忍者が諜報活動のため行き交った地です。そこで、歴史に興味をお持ちの両町住民を募集し、平内町や青森市の忍者ゆかりの地と、弘前市の忍者屋敷を訪ねるバスツアーを11月8日（日）に実施しました。折しも弘前市で新型コロナウイルスのクラスターが発生し、ツアー直前のキャンセルもありましたが、検温、消毒及びソーシャルディスタンスを徹底するとともに、弘前市内でコースを変更するなど、できる限りの感染防止対策を実施して催行しました。

小湊駅へ集合し、最初に平内町の久斯(くし)神社へ向かいました。この神社には、奥州街道から南下し、東岳を經由して青森町に侵入する南部藩の忍者を監視する薬師野番所が併設されていたと推定されます。薬師野の地名はこの神社が江戸時代、薬師堂として山伏の活動拠点となっていたことに由来し、その多くは明治になって久須志神社に改名しています。番所には棟方氏のほか、対馬、中畑、貝森の各氏が駐在していたと古文書に記載があり、恐らく4氏とも山伏として時折南部領にも侵入して情報収集をしていたと思われます。

次に青森市の野内番所（関所）跡地に向かいました。ここは津軽三関の一つと言われ、厳しく検問が行なわれていたことで知られています。上記4氏の故郷は野内にあり、そのうち棟方氏は隣接する宮田地区で修行のために宮田八幡宮を再建しました。ツアーでは八幡宮の境内にある宮田の大イチョウは、鎌倉～室町時代、修験道の山だった東岳の結界として植えられたことを解説しました。

午後は弘前市の忍者屋敷に入り、忍者の歴史や屋

地域貢献センター長 清川 繁人

敷の構造について詳細にお話ししました。野内の棟方氏は弘前に転居した後、忍術家となって甲賀流忍術を継承し、「早道之者」と呼ばれる忍者集団を統率しました。江戸時代の古地図にも、忍者屋敷の所有者として棟方氏が記載されています。

一行は、棟方家代々の菩提寺となっている曹洞宗・宗徳寺や、ねぶた祭り発祥の地と推定される真言宗・最勝院周辺を散策し、ねぶた祭りや疫病、修験道、そして忍者との関連性を紹介しました。

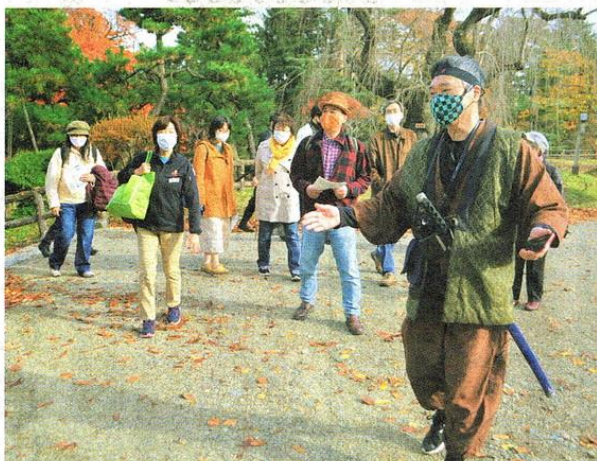
参加者からは、これまで知られていない平内町の歴史を知り、多くの町民に知らせたい、といった声が聞かれました。ツアーの様子は東奥日報紙や陸奥新報紙、青森テレビでも紹介され、陸奥新報社から許諾を得ましたので、記事を転載させていただきます。



弘前藩に仕えた忍者部隊「早道之者」の足跡をたどる見学ツアーが15日、弘前市で行われた。参加者は弘前城や周

辺の「忍者屋敷」などゆかりのスポットを巡り、地域に眠る忍者の歴史に思いをはせた。(船越太郎)

早道之者、足跡たどる



清川教授(右)の案内で弘前城など早道之者ゆかりの地を巡った見学ツアー

弘前で見学ツアー

青大地域貢献
センター企画 来年以降本格化へ

ツアーは青森大学地域貢献センター(清川繁人センター長・同大社会学部教授)が企画。弘前市には忍者部隊の活動拠点だったとされる古民家「旧相馬家住宅」が残っており、早道之者の調査研究を行う清川教授が

観光資源として活用しようとする。今年8日には同大と包括連携協定を結ぶ平内町と三戸町の住民を対象にツアーを開催した。

15日は青森市の旅行会社「また旅くらぶ」がツアーを主催し、弘前市など県内3市から8人が参加。清川教授の案内の下、弘前公園の四の丸や本丸、同市森町の旧相馬家住宅などを約2時間半で巡った。参加者は途中で玩具の手裏剣を使った的当てに挑戦したり、同大忍者部の体術パフォーマンスを鑑賞したりして、楽しみながら早道之者の歴史を学んだ。

同市の主婦榎庭静子さん(70)は「伊賀や甲賀に負けない忍者の歴史が地元にもあることを楽しく知れた」

と満足げな表情。清川教授は「忍者の活動地域としての魅力を発信していけるように、来年以降ツアーを本格化させていきたい」と話した。同ツアーは22日にも開催予定。

陸奥新報 令和2年11月16日付2面
記事、掲載許諾済

2. 幸畑団地・青森大学の合同防災訓練

幸畑団地地区まちづくり協議会と青森大学の合同防災訓練が11月29日、NPO法人青森県防災士会青森支部の支援を得て、青森大学6号館で行われた。今回は初めて、親子連れが楽しめる「防災クイズラリー」形式を採用し、参加者らはゲーム感覚で歓声を上げながら、災害や防災に関する知識を深めていた。

合同防災訓練は、同協議会と青森大学が開催してきた。これまで避難所運営ゲームと心肺蘇生法を組み合わせた内容を主に実施してきたが、子育て世代にもっと防災に親しんでもらおうと、新たな方式を考案した。

約40人が参加したオープニング・セレモニーで大川久志・まちづくり協議会会長、小山内敬子・青森県防災士会会長があいさつした後、子どもたちは「人が1日に必要とする水は何リットル？」「食料や水の備蓄は最低何日分？」といった全10問の防災クイズに挑戦した。

会場では、段ボール・ベッドや非常食、各種防災グッズが展示されたほか、心肺蘇生法の体験コーナー、防災図書コーナーも設けられた。また、非常食のアルファ米の試食も行われ、青森大学自然サークルSDGsのメンバーが、焚き火でお湯を沸かして、参加者に振る舞った。

合同防災訓練の様子は、青森放送と東奥日報が取材した。



地域貢献センター 榎引 素夫



3. 10～11月の活動報告

今年度は、観光庁連携事業である「観光産業中核人材育成事業」に加え、2つの助成事業を展開している。一つは日本たばこ産業株式会社の「JT SDGs 貢献プロジェクト助成」、もう一つは、環境省の令和2年度の補正予算「国立・国定公園への誘客の推進事業費及び国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業費補助金」の事業である。

これらの事業を8月以降随時実施してきた。11月末までに11回の事業を終了し、12月以降年明け2月までに残りの5つの事業を展開する予定である。

今号では、前号で報告した5つの事業以降10月、11月に実施した事業6つの事業報告をする。

⑥「観光産業中核人材養成講座：小樽商科大学・観光省共催事業」

観光資源としての自然由来の素材を対象に、自然資源を活用した体験型観光商品に企画・展開ができる人材の育成を目的として第1タームと第2タームの連続講座を開催した。

▶第1ターム（JT SDGs 貢献プロジェクト助成事業）

青森の自然資源や歴史・文化について学び、その質的な価値の理解を深め商品開発を企画する上で必要な知識を醸成するプログラムを実施した。

実施日：10月10日(土)-11日(日)

会場：小牧野遺跡、青森大学ヒュッテ

参加者：一般・学生18名

・「縄文クッキング～どんぐりのひつまみ鍋を縄文土器で食す」

講師：児玉大成

（青森市教育委員会事務局文化財課）

青森市郊外にある「縄文の学び舎・小牧野館」で縄文文化の料理体験という視点をテーマした。黒曜石で鹿肉を切って焼いて食す体験、どんぐりを擦り潰し小麦粉で練って「ひつまみ鍋」を作り、縄

観光文化研究センター長 佐々木豊志

文土器で食す体験と縄文を感じる講座になった。
(写真1)



・「森の魅力～森と小牧野遺跡のフィールドワーク～」

講師：渡辺洋一（写真家）

会場を国指定史跡・小牧野遺跡に移し、世界各地の森を撮り続けている写真家渡辺洋一氏のファシリテートで遺跡のフィールドワークを行った。森を見る視点、自然と向きあう感性に響く時間となった。

・「山葡萄のストレートジュースづくり～古来からの山の恵みを味わう～」

講師：玉熊恭子（あおり和ハーブの会・樹木医）

戸澤依香子（あおり和ハーブの会）

会場をモヤヒルズにある青森大学に移し、山葡萄の実を絞り濃厚な山葡萄ジュースを作り、搾かすで絹のハンカチを輪ゴムで絞り草木染めを行った。自然の素材を活かした食とクラフトの体験であった。

(写真2)



・「未病を知る～社会とともに歩む～」

講師：大越絵実加（青森大学薬学部教授）

薬草の研究をしている本学薬学部の大越先生にご登壇いただき「薬草、について学んだ。「桔梗」と「甘草」のお茶をブレンドし食してみた。自然由来の素材である薬草を通じて、健康・食を考え『未病』とう健康寿命を延ばすヒントを頂いた。（写真3）



⑦「塚原俊也の森に遊ぶ講座～キャンプ入門編講座」（JT SDGs 貢献プロジェクト助成事業）

実施日：10月17日(土)-18日(日)

会場：青森山田学園所有山林（市内沢山）

参加者：3家族・学生20名

講師：塚原俊也（くりこま高原自然学校）

住吉利允（くりこま高原自然学校）

幾つかの事業では「森」をテーマに取り上げている。この回は、本学園が所有する山林を会場にキャンプの基礎をベースに家族も参加できる入門講座となった。1泊2日の日程でロープワーク・テント設営・野外料理・火と対話・バードコールなどを指導していただいた。（写真4）（写真5）



⑧「長野修平の森の楽しみ～焚き火料理&クラフト講座～」（JT SDGs 貢献プロジェクト助成事業）

実施日：10月24日(土)-25日(日)

会場：青森大学ヒュッテ（モヤヒルズ）

青森山田所有山林（市内沢山）

講師：長野修平（ネイチャーワークス代表）

玉熊恭子（樹木医・あおり和ハーブの会）

参加者：一般・学生20名

今回も「森」に向き合う講座。焚き火料理の達人として数々の雑誌やTVに出演されている長野修平氏に極意を伝えていただいた。初日は雲谷地区で有機野菜を栽培している桜田農園から収穫した野菜をふんだんに使ってダッチオーブンの焚き火料理を体験した。2日目は、学園所有の沢山の山林を樹木医の玉熊氏のガイドで、樹木を見ながらクラフト用の材木を探し、そしてその材料で長野氏の指導による木工体験をした。火と刃物のある暮らしをテーマにした奥深い講座になった。（写真6・7・8・9）





⑨「観光産業中核人材養成講座：小樽商科大学・観光省共催事業」

▶第2ターム」(JT SDGs 貢献プロジェクト助成事業)



第1タームで学んだ自然資源や歴史・文化の価値を商品化し、体験型観光商品を事業化するためのマーケティング戦略や具体的な販売手法について学び、1・2タームを合わせて地域のシーズと観光客のニーズにつなげる戦略を考える講座になった。北海道から来青予定だった3名の講師は、コロナ

対策上急遽リモートでの講演となった。

実施日：11月5日(木)～6日(金)

会場：アスパム4階「十和田」

初日(11月5日)

・「ポストコロナ時代の青森の観光戦略」

講師：高坂幹(青森県観光連盟常務理事)

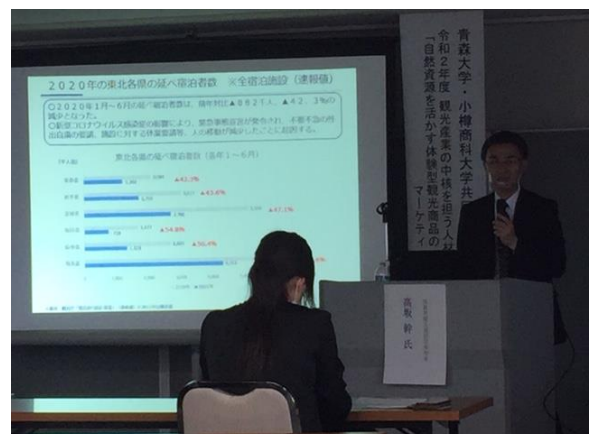
長年青森県の観光行政に携わり、様々な戦略を実行されてきた高坂氏より、今後の展開のヒントをいただいた。

・「ポストコロナ時代の八甲田山域の広域観光の展開」

講師：蝦名正晴(八甲田ロープウェイ株式会社代表取締役社長)

国立公園内にある索道事業者である八甲田ロープウェイが考えている広域観光のあり方を示していただいた。八甲田の自然資源としての魅力の話の他に域内の顧客を奪い合うのではなく域内観光事業者が連携し観光客の視点での利便性を高める協働のあり方を示され、今後の広域での取り組みを考えることができた。

(写真10・11)



・「自然体験型観光商品と DMO/AOMORI BASE」
講師：佐々木豊志（青森大学観光文化研究センター長）

これまでの流れを受けて、体験型観光商品を展開している世界や国内の事例を紹介しつつ、一昨年から模索している DMO/DMC を目指す「AOMORI BASE」の紹介をした。今後、青森の自然資源を活用し自然体験に特化して企画・展開をする事業体として DMO/DMC の可能性を探る課題を提起し、翌日のパネルディスカッションの論点を紹介した。

2 日目（11 月 6 日）

・「地域資源から考える～青函圏のディスティネーション・マーケティング」

講師：内田純一氏（小樽商科大学大学院商学研究科教授）

資源価値・観光スタイル・観光資源・観光のパスバリエーションと観光を付加する情報をいただいた。津軽海峡を挟む青函エリアと海外のデンマークとスウェーデンのエーレスンド海峡の「海峡都市をブランドにする」傘ブランド戦略を事例にブランド論からみた広域連携の可能性を考え、さらに幾つかの事例を見ながら地域資源ベースで観光振興を考える時間をいただいた。

・「事例に見る観光資源の活用」

講師：近藤真弘（一般社団法人地域の魅力研究所理事）

「観光資源の重要性」「観光資源の発掘・高付加価値化」この二つを軸に観光資源とは何かを考え、希少性と経済価値を正しく把握するポイントを解説し、その観光資源を高付加価値な商品・サービスに磨き上げる工夫を指摘していただいた。

・「体験型観光商品開発の手法と実践」

講師：鈴木宏一郎（株式会社北海道宝島旅行社代表取締役社長）

鈴木社長が取り組んできた、株式会社北海道宝島旅行社の創設からこれまでの取り組みを紹介していただき、観光地域づくりに取り組むに至る仕組みを提示していただいた。北海道を最高の観光地にするために北海道 NO.1 のオペレーターを目指している。体験型

観光商品を旅行者へ届けるために地域のコーディネーター、ガイドプレーヤーと連動した商品販売フローイメージを構築してきた。その先には、生き生きと暮らせる地域が住み続けられる町ヘシビックプライドの保持、外のお金を出さない地域の努力（地産地消による仕事の確保）、そして地域を一つの会社に見立てた地域経営に取り組みことの必要性を考えた。四方よし（観光客よし、観光事業者よし、地域よし、環境よし）を実現・マネジメントするのが DMO/DMC の役割であることを指摘していただいた。

・パネルディスカッション

パネラー：近藤真弘（一般社団法人地域の魅力研究所理事）

鈴木宏一郎（株式会社北海道宝島旅行社代表取締役社長）

柳谷章二（八甲田ロープウェイ株式会社代表取締役会長）

其田知志（AOMORI BASE / 酸ヶ湯温泉ツアーガイド）

喜來大智（AOMORI BASE / 青森大学 4 年）

モデレーター：佐々木豊志（青森大学教授観光文化研究センター長）

講座の最後に『自然体験型観光商品を展開するための地域機能「DMO」を展開するための可能性を問う』テーマにパネルディスカッションを行った。これまでに講座での講師からの情報と課題の提起を受けて、再度それぞれの意見を公開し討議した。今度、DMO/DMC を目指す「AOMORI BASE」が青森で自然体験に特化して企画・展開をする事業体としての可能性を再度探った。

⑩「薪の魅力講座」（JT SDGs 貢献プロジェクト助成事業）

実施日：11 月 15 日(日)

会場：青森大学ヒュッテ（モヤヒルズ）

講師：相馬壮（woodrack）

石村真弓（woodrack）

参加者：一般・学生 17 名

市民一人当たりの灯油の使用量日本一の青森市。ここからこの講座が始まった。県名に「森」がつくのは青森県だけ、未来の青森を語るに森に向き合わずして語ることなかれ・・・こんな想いがこの講座にはありました。

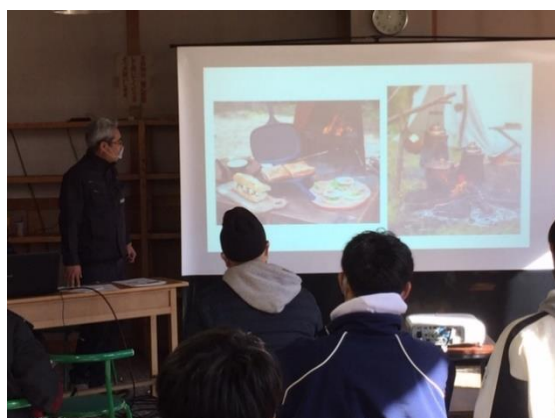
森からエネルギーを得ることは、地域にお金も資源も循環することになります。化石燃料を買うことは海外にお金流れます。

青森県民・市民にとって「薪」がもっと身近なものになるための「薪の魅力伝える講座」になりました。

相馬社長の話から woodrack は、ただ単に薪ストーブを販売するだけの会社ではなく、森林資源が健全に循環し持続可能な地域資源にあり続け、健康で豊かな暮らしの実現に寄与する社会的企業であること理解できました。

薪のサウナ、薪でピザ、薪割り体験と薪に向き合う時間でした。

(写真 1 2・1 3・1 4・1 5)



⑪「発酵文化ツーリズム発明家 小泉武夫先生直伝! ~日本を醸し続けてきた文化から「今」を乗り越えるヒントを学ぶ~」(JT SDGs 貢献プロジェクト助成事業)

実施日：11月22日(日)

会場：青森大学6号館記念ホール

参加者：80名

講師：小泉武夫（東京農大名誉教授・農学博士）

地域の自然資源を観光資源に活用するという講座に取り組み続け、自然由来のハーブや薬草というテーマにも取り組んできました。そしてその先には、食と健康という領域のテーマにたどり着きました。今回は、一見観光と繋がりが無いような講座名ですが、「発酵ツーリズム」という視点を発見しこの講座の開講に至りました。そして、発酵食品・発酵文化を探求し続け世界中を旅してきた小泉武夫氏をお迎えいたしました。

コロナ禍の今、地球にとって、人間にとってこの節目をどう捉えるのか。世界の発酵文化を自らの五感で吸収され発信を続け、さらに日本ならではの発酵文化を世界へ発信をしている発酵ツーリズム発明家小泉武夫先生の直伝の講座になりました。

短命県返上と言われ続けている青森県ですが、生活に何の支障もない健康寿命を延ばすという視点で、健康寿命を維持する発酵食の知られざるパワー、秘密の数々を伝授していただきました。

この講座のテーマは、今後シリーズ化して来年度以降も継続したいテーマとなりました。

(写真16・17・18)



4. SDGs 研究センター活動報告

SDGs 研究センター長 藤 公晴

今日、SDGs（持続可能な開発目標）の 17 目標のアイコンは多くの人たちの目に触れる機会が増えたが、169 のターゲットそれぞれにもアイコンがあるのをご存知だろうか。2030 年の同達成に向けて、青森大学のような地方の小規模大学が踏まえるべき点は、目標 4「質の高い教育をみんなに」に位置づけられた 10 のターゲットの 4.7 に集約されている（当該アイコン参照）。



TARGET 4.7 ターゲット 4.7 の説明は下記の通り。

2030 年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化が持続可能な開発にもたら

す貢献の理解などの教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために、必要な知識とスキルを習得できるようにする。

各高等教育機関の専門性や地域社会の接点、経営戦略などが、169 それぞれが掲げる個別テーマとねらいに貢献することは言うまでもないが、地域の担い手の育成と地域の産官学民のつなぎ手という大学の基本的特質を踏まえると、地域の高等教育機関は 17 目標 169 ターゲット全ての分野に貢献する可能性を有している。

1. SDGs 研究センター勉強会

令和 2 年度の SDGs 研究センターの勉強会は、以下の通り 11 月下旬時点で計 5 回実施し、第 6 回勉強会を 1 月 22 日に実施する予定である。

第 1 回（7/3）石井重成氏「ポストコロナ時代のローカルキャリアとキャリア支援：釜石の地方創生と『ローカルキャリア白書』を事例に」

第 2 回（8/7）佐々木豊志氏「SDGs 時代の幼少年期の自然体験と人間形成」

第 3 回（9/11）高橋博志氏、柏谷至氏「地域に根ざすバイオマスエネルギー：その可能性と課題」

第 4 回（10/3）喜來大智氏、小柴圭太氏、後藤欣司氏、佐々木豊志氏「学生が歩く“みちのく潮風トレイル（10 分の 1）” 青森発」

第 5 回（11/13）相澤久美氏「SDGs 時代のパートナーシップ：「聴く」ということ」

第 6 回（1/22）竹内健悟氏「弘前藩庁日記に記録された鳥の話：津軽地方の人と野生生物の関係」

各回概ね 30～35 名の参加が学内外からあったが、特に第 4 回勉強会は日本エコツーリズムセンターと観光文化研究センターとの共催でオンライン参加者が 30 名近くあり、合計 50 名近くにのぼった。各回異なるテーマを切り口にしつつ、青森大学のような地域の高等教育機関における教育の質向上の方向性や課題について学び合うスタイルをとっており、これらの成果をもとに 2020 年 12 月中に青森大学における教育の質向上に関する提案書をまとめるべく準備調整を進めている。

2. 青森山田高等学校特進コース SDGs プログラム

前回の総研だより(第 2 号)で報告したが、今年度、青森山田特進コース 2 年(26 名)の総合的な探究の時間で、SDGs 活用を通じた体系的な学習機会を本学 4 学部のゼミなど 6 つのチームが創意工夫で提供しており、本学学生もメンター役として多数参画している。

全体プログラムとしては、7 月に青森山田高等学校特進コース 1、2 年生 50 余名を対象に SDGs の経緯や意義、可能性について講話を行い、10 月 27 日は Zoom を活用して、その基本的な利用について教えた上で、この SDGs プログラムの考え方と取り組み方についてディスカッションを行った。Zoom の接続、利用はほぼ全

員にとって初めてだったので、細かなトラブルが多かったが、生徒同士助け合い貴重な経験になったようだ。

a. 薬学部官学・高大連携 ツバキ油試作品開発プロジェクト（薬学部 大越絵実加教授、佐藤 昌泰准教授、三浦裕也教授）

9月19日にツバキ自生北限地帯として天然記念物に指定されている平内町の全面的な協力のもと、ツバキ油の試作品（ヘアケア椿油、椿油とホタテ胡粉を組み合わせ



た石けん）開発に向けて、平内町夜越山森林公園で種子採取アクテ

ィティを実施した。当日は青森山田高校の生徒18名（2年生8名、1年生10名）と教員3名、大学から教員4名、薬学部学生アシスタント5名が、平内町役場スタッフ6名の支援を受けながら、怪我もなく無事プログラムを

終えた。薬学部の学生らは今回の成果を踏まえて、学会発表の準備に奔走している。



b. 読み聞かせグループ（社会学部 秋田 敏博教授）

9月下旬より、青森大学読み聞かせサークルの学生とともに、火曜日午後を中心に高校を訪問し、対象生徒6名を対象に、読み聞かせに関する講義や演習をおこなった（9/29, 10/13, 20, 27, 11/10, 17, 24）。こうした講義を踏まえて10月31日にアスパムで実施したイベント時に、青森大学読み聞かせサークル、青森中央

高校読み聞かせ隊などと共に対象生徒4名が参加し、読み聞かせブースを運営した。また、11月14日実施の甲田小学

校の放課後児童会では特進コース生徒3人で読み聞かせを開催し、11月



28日にも甲田小学校放課後児童会を訪問した。12月以降も可能な範囲で訪問する予定。

c. 観光人材グループ（総合経営学部 佐々木豊志学部長、観光文化研究センター長）

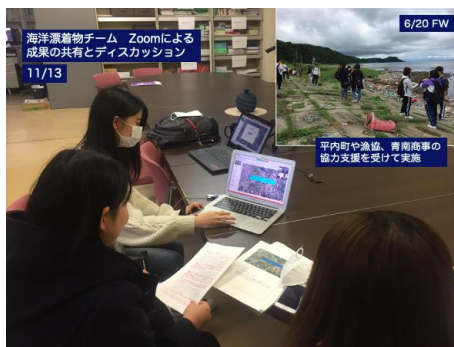
8月上旬、八甲田外来帰化植物駆除のアクティビティを八甲田ロープウェイの協力のもと実施予定だったが、強風のため急遽毛無岱への高山植物観察・ハイキングに変更した。以降、主に観光文化研究センターの様々なイベントへの参加機会を経て、11月22日の発酵文化ツーリズムの講演会に生徒7名が参加した。12月19日、20日に雪板の制作と体験プログラムをモヤヒュッテで実施する予定。

d. ICT小学生プログラミングプロジェクト（ソフトウェア情報学部 角田 均学部長）

11月15日(日)の午後、東奥日報主催の小学生プログラミング教室のプレテストに青森山田高校特進科の2年生2名が参加した。東奥日報新町ビル2階の7C'sを会場に橋本小学校4～6年生の生徒9名が参加、プログラムを作成してドローン飛行にチャレンジした。青森山田高校生2名とソフトウェア情報学部の学生2名がサポートを担当し、参加した生徒たちの初めてのプログラミングをサポートした。プログラミング教室の本番は12月5日(土)、午前と午後20名ずつの小学生が参加して、東奥日報新町ビル3階の会場で開催の予定。

e. 平内町海洋漂着物チーム（社会学部 藤公晴）
11月13日に社会学部2年生3名が、特進コース

2 名を対象に平内町夏泊半島の海洋漂着物問題とその解決策に関するプレゼンを Zoom で行なった。学生 3 名は前期の環境社会学（担当：金二城教授と藤 公晴）で各自が取り組んだ課題を対象生徒 2 名に紹介し、海洋漂着物の問題の複雑さと参加の重要性について生徒達と話し合った。今後は 2 月中旬に平内町で開催予定のハクチョウのまち再生シンポジウムに共に参加する予定。



3. 語学教育 + 海外協定校交流の新たな展開 グローバル英語（鹿内 史講師と藤 公晴）

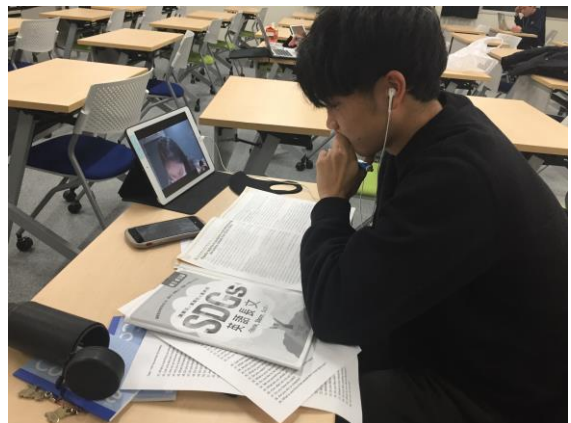
コロナ禍で台湾の協定大学、実践大学との共同ゼミが適わない今年度のグローバル英語(4 単位)では、Zoom

による学生マンツーマン英会話レッスンを 11 月上旬から 12 月中旬にかけて実施している。このプ



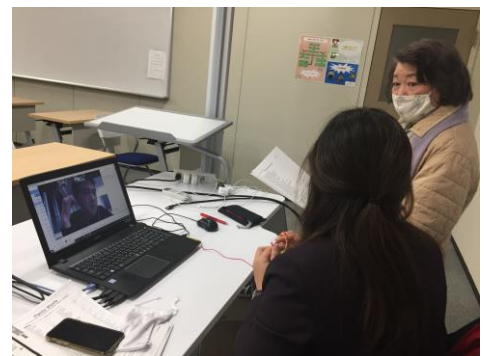
ログラムは昨年度と同様、公益財団法人青森学術文化振興財団の助成事業「SDGs 時代の地方創生における高等教育機関の役割に関する調査研究②」の主要プロジェクトで、SDGs という国際共通言語の導入による個人や組織、地域社会の変容を目指しつつ、地方の高等教育機関の教育の質向上を図るため方策を整理することを目的とする調査研究である。

今年度は台湾 実践大学の応用外国語学部 (Department of Applied Foreign Languages) の Dr. Michelle Chen 学部長を中心に、同学部で英語教授法を専攻している学生 5 名が、毎週月曜と木曜



の 18 時から 1 時間マンツーマンで本学学生 5 名（総合経営学部 2 名、社会学部 1 名、ソフトウェア情報学部 2 名）に英会話を集中的に教える仕組みに落ち着いた。台湾国内の大学でも国際化が突出して進んでいる実践大学には、英語のみの学部やプログラム(ETP- English Taught Program)も複数あり、学生たちの英語力は全般的に非常に高い。参考までに、世界の英語人口約 17.5 億人の約 8 割が第 2 言語として英語を使用しており、こうした英語ネイティブ以外の人々との英語コミュニケーション力の向上も教育の国際化を進める上で重要な観点である。こうした点と本学の英語カリキュラムの実情を踏まえると、同世代同士のマンツーマン形式の英会話は通常では得ることの出来ない学習機会ではなかろうか。

今回の学生によるマンツーマン教育の試みは、オンラインによる語学教育という可能性だけで



なく、英語教授法(TESOL- Teaching English to Speakers of Other Languages) を学ぶ海外協定大学の学生による実習・演習として、本学の英語教育の一部を担うことの有効性を示している。この点は、現在本学で実施している日本語教員養成プログラムの履修者が海外協定校の日本語習得を目指す学生らに対して、同様の指導ができる可能性をも示しており、協定大学との交流の質向上、言いかえると本学の教育の国際化、

質向上につながるものと考えられる。

今後の予定

12/13 高校生科学研究コンテスト SDGs 部門賞

12/13 第 10 回青森市環境フェア 2020 出展

1/22 第 6 回 SDGs 研究センター勉強会

1/29 黒石商業 SDGs 講義

青森銀行 SDGs PR 映像制作企画

5. 公営バス事業経営改善に向けた提言について

青森大学附属総合研究所顧問 井上 隆

私は、この一年余、青森市自動車運送事業運営審議会々長として、青森市営バスの経営改善プラン策定に参画してきた。単に役職として関わってきただけでなく、地域経済論・都市論の研究の一環として個人的関心を持ち私的調査・研究を並行させながら、取り組んできた。青森都市圏の人口減、バス利用者減、乗車料収入減が見込まれる経営環境の中で、「市民の交通利便性を低下させない・犠牲にしない、交通ニーズに的確に対応する」を前提にして、審議会の議論に積極的に係わってきた。

その結果、今後想定される経営環境の変化を広角的・多面的に把握し、諸課題も重層的に設定出来たと自負している。課題をクリア（解決）する取り組みは、拡充した取り組みや新規のものを含め 42 項目に及ぶ。投資・財政計画は、無理なく実現出来るよう、堅実に積算し地に足付いたプランを作成した。資金不足比率は R

2年の9.9%から10年掛けて0.0%（R12年）へ、一般会計負担額もR2年の22億円から10年掛けてR12年の10億円へ半減することを目標としている。

去る11月24日、青森市長に対し「青森市自動車運送事業経営戦略（2021－2030）」を取り纏め、答申した。以下の記事は、『東奥日報』（2020.11.25.）からの抜粋である。

青森市営バスの経営について審議する「青森市自動車運送事業運営審議会」（会長・井上隆青森大教授）は24日、2021年度から10年間の経営戦略案を小野寺晃彦市長に答申した。広告事業の強化や経費の抑制など経営改善に継続して取り組む内容となっており、小野寺市長は「素晴らしい答申をまとめていただいた」と評価した。

6. 新聞を導入した特別授業の展開

社会学部 櫛引 素夫

青森県の地方紙・東奥日報の紙面と社員の講話を授業に活用する特別授業を11月30日にスタートさせた。12月21日まで4週間にわたり、記者の活動や新聞とネットの関係に理解を深めながら、学生たちが新聞を読み、メディアの現状と課題、可能性を探る。

特別授業は、社会学部で後期、筆者が担当している「メディア論」を舞台とした。履修者は2～4年の51人（総合経営学部1人、社会学部50人）。9月以降、新聞をはじめとするマスメディア、成長を続けるネットやSNSについて学習を重ねてきた。

11月30日の授業では、東奥日報社報道部の三好陽介記者が、記者の仕事や取材歴をテーマに講話した。仙台市出身で、工学系の大学に入学した後、地元紙記者に取材を受けたのがきっかけで記者を志した経緯や、経済分野を主に担当し、ローソンやイトーヨーカドーの進出取材した経験を解説した。

学生からは「記者にとって最も大切なことは？」と質問があり、三好記者は「さまざまな現場を自分の目で確かめること」と強調していた。

この企画はもともと、東奥日報社から就職課経由で、「NIB」(Newspaper In Business)として持ち込まれた。しかし、表面的に新聞の利便性・有用性を説いただけでは、スマホ漬けの学生たちには届かないと考え、「新聞の役割や新聞社の仕事に理解を深め、大学生の視点から新聞が抱える課題、可能性を考える」立て付けにした。新聞側も、特に若い世代の新聞離れを懸念しており、「読者と作り手が、ともに新聞・メディアと社会の将来を考える」という場を目指している。

社会学部の経費で、学生向け割引価格で新聞を4部、3カ月間購入し、学生に配布するとともに、東奥日報社が提供している東奥日報閲覧アプリも活用し、学生にさまざまな形で新聞に触れてもらう。

いわゆるレガシー・メディア、特に新聞に対しては、批判やバッシング、誹謗中傷がネット社会で日常化している。そして、学生たちはほとんど新聞や新聞社、記者に直接の接点がないまま、ムードで、周囲の訳知り顔の解説をそのままのみ込んで、「新聞なんて」と口にしがちである。

新聞に対する批判には、新聞側が反省すべき点も少なくない。しかし、最終的に

「新聞不要」や「新聞は害悪」という結論に学生たちがたどり着くにせよ、まず、自分なりに情報を入手し、整え、対話・議論する、というプロセスをきちんと経験し、身に付けてほしい、と考えている。



◇総研日誌（2020年10月1日～11月30日）

▽10月3日(土)

・SDGs 研究センター第4回勉強会

▽10月10日(土)-11日(日)

・観光産業中核人材養成講座⑥

▽10月17日(土)-18日(日)

・塚原俊也の森に遊ぶ講座⑦

▽10月24日(土)-25日(日)

・長野修平の森の楽しみ講座⑧

▽11月5日(木)-6日(金)

・観光産業中核人材養成講座⑨

▽11月8日(日)

・「早道之者」の足跡をたどるツアー

▽11月13日(金)

・SDGs 研究センター第5回勉強会

▽11月15日(日)

・薪の魅力講座⑩

▽11月19日(木)

・定例運営会議

▽11月22日(日)

・発酵文化ツーリズム 小泉武夫氏講演⑪

▽11月29日(日)

・幸畑団地地区まちづくり協議会・青森大学・合同防災訓練

◇編集後記

「総研だより」第2巻第4号をお届けします。コロナ禍が世界を覆い始めて間もなく1年。時間の長さとの経過の速さにあらためて驚きます。

必ずしも例年通りとはいかないまでも、観光文化研究センターやSDGs研究センターは着実に事業を伸展させ、地域貢献センター関連でも、多彩な取り組みが展開されました。

今後、2月にかけて、総研主催のシンポジウムや、地域貢献センターが中心となって開催される「地域フォーラム」、さらには青森市内の6大学等が互いの研究成果を披露する「Aomori-Six」などが控えます。本年度のアウトプットをどう締めくくるか、年末も年度末もすぐそこです。（素）